

氏名 平田 周

派遣先 ヒルデスハイム(ドイツ)

派遣期間 2012年11月21日から2012年11月25日

派遣(研究)の概要

報告者はこの度の派遣期間において、ヒルデスハイムで開かれた「2012年ITP-EUROPA国際セミナー」に参加し、「都市問題からスケール問題へ」と題した発表を行った。この発表タイトルのもと、1980年代末以降に英語圏の都市社会学、地理学、カルチュラルスタディーズといった領域で参照される思想家アンリ・ルフェーヴル(1901-1991)の都市論と国家論の関係を扱った。この問題を扱うことで、社会科学において議論の争点となっているグローバリゼーションと国家の変容の関係をめぐる認識問題の解明に資することが発表の目的であった。

ルフェーヴルの都市論において分析対象となるのは、戦後フランスの都市化、主にパリの都市化であった。この都市化のプロセスは一方で、「ベビーブームと1950年代の中頃から加速する農業の機械化による農村からの都市流入による住宅危機に応える住宅・都市政策によって実施された。他方でこの都市化のプロセスはパリの中心と周縁(第一次世界大戦後から見られた一戸建てと、そして第二次世界大戦以後において都市政策によって行われた住宅群の建設とによる郊外の拡大)の地理的階層関係を伴っていく。ルフェーヴルはこうした都市化の要因として、資本の投機の経路が本来一時的な経路である生産財(もの)から二次的な経路である土地(空間)への移行していることを分析し、利潤獲得のための空間の生産が都市の居住形態に影響を及ぼしていることを批判の対象としている。

ルフェーヴルの国家論において分析対象となるのは、1950年代以降のアジア・アフリカでの脱植民地化と国民国家という政治形態の「世界化」のなかで、新しい国際分業(かつての分業においては中心が製造業を、周辺が原材料の生産を担っていたが、新しい国際分業では製造業は中心へと移転され、中心における脱産業化が進展する)を特徴とする経済的グローバリゼーションにおける、国家の空間の再編成であった。

報告者は、ルフェーヴルの「スケールの」概念が、これら二つの理論を通して観察される都市化と世界化の二重のプロセスが産み出す都市、地域、国家、世界の領域的關係を捉えるために存在することを明らかにした。

派遣による研究の成果

本研究(発表)は、パリ第8大学に提出するために準備中である報告者の博士論文の第三部を構成するものである。最終的にこの研究を博士論文に組み込むために加筆修正が要請されるが、その前段階の作業として十分に進展があるものであったと自己評価している。

今後の課題

「2012年 ITP-EUROPA 国際セミナー」が発行する論文集に今回の報告を掲載するという貴重な機会を頂いたので、そのためにまず報告を論文の形にまとめる。次に報告で発表した研究内容を深め、発展させるために主に以下の二つの論点との関連で引き続き研究を行う。第一点は、ルフェーヴルと同時代に国家論を発展させたニコス・プーランザスとの関係の批判的検討である。そこでフランスでの国家論においていかにルフェーヴルの国家論が位置づけられるかを明らかにしたい。次に「グローバルスタディーズ」の有力な理論家であり、国家とグローバリゼーションの関係を明らかにする鍵概念「脱国民化 denationalization」を提出しているサスキア・サッセンの議論を支えに、ルフェーヴルの国家とグローバリゼーションの関係の考察を補完する。「脱国民化」の概念は、様々な経済領域の「民営化 privatization」やそれらの経済活動コントロールする法的権限の国家から企業のような「私的」領域あるいは国家より高次の国際機関への委譲によって引き起こされる事態を理解するために有効な概念であるように思われる。以上の二点との関連から展開された議論を論文の形にまとめ、報告者が属する社会思想史学会が発行する2013年度の年報に掲載できるように研究を進めたい。

最後に、本発表の技術的な側面についての個人的反省からの今後の課題として、本セミナーでは、それぞれの地域研究者がそれぞれの研究対象である地域の研究を行うために前提とされている当該地域の言語運用の場として、多言語的な環境で行われた。しかしそうした多言語的な環境において、その他の言語の最も媒介となる言語は英語であり、その英語のコミュニケーションが報告者に欠如しているとはいわないまでも円滑に進まない部分が多かったように思われる。より広く国際的な場での意見交換が行えるようにこの点を改善していきたい。